『今昔物語集』所収竹取説話の教材（学習材）としての可能性

――『竹取物語』との比較の先にあるもの――

有馬義貴

一　はじめに

新学習指導要領の全面実施（年次進行）により、高等学校では、平成二十五（二〇一三）年四月から「国語総合」、平成二十六（二〇一四）年四月から「古典A」及び「古典B」において新たな教科書が使用されている。

それらに収録されている教材（学習材）の中で、特色のあるものの一つに、第一学習社『高等学校 古典B 古文編』（古B322）・『高等学校 古典B』（古B328）・『高等学校 標準古典B』（古B324）・『高等学校 標準古典A 物語選』（古A305）の『竹取物語』の教材（学習材）[1]末尾で「言語活動」として設定されている、「『今昔物語集』との読み比べ」の「課題」がある。いずれの教科書のものも同じ文章であるが、ひとまず『高等学校 古典B 古文編』（古B322）から引用する。

『今昔物語集』（巻三十一・第三十三）の「竹取の翁、女児（めのこ）を見つけて養ふ語（こと）」は、『竹取物語』とほぼ同じ内容を、短く簡潔に伝える説話である。そこでは、帝に求婚されたかぐや姫は、「自分は鬼でも神でもないけれど、空から人が迎えに来る。」と答えて、ほどなく昇天してしまう。翁夫婦と別れを惜しむ場面は描かれていない。

課題　『今昔物語集』と『竹取物語』では、かぐや姫が結婚の条件として貴公子たちに出した難題の数と内容が、どのように異なっているか、また、かぐや姫が昇天した後の帝の行動にはどのような違いがあるか、読み比べて説明してみよう。

『今昔物語集』所収のいわゆる竹取説話（以下、『今昔竹取』）は、教師用指導書において参考資料などとして掲載されることが一般的であるが、上述の教科書では、『今昔竹取』の本文自体は挙げられていないものの、指導書ではなく教科書の中でその存在が紹介

されており、学習者の目に触れやすい形になっている点で注目に値する。

森晴彦氏も、「今回検定の版から登場した」この「課題」について、「成立に関わる思想史的影響や時代変遷や物語の創作過程を考える上で大変重要な比較ができることもあり、単に調べ学習にとどまらず意義ある設問であると考える」とされ、「この設問が設けられる前から『竹取』と『今昔竹取』の比較を過去、高校でも大学の授業でも導入していた」というご自身の経験も踏まえて評価されている[2]。森氏は、「この設問の展開について、思想史的な位相と中世注釈書世界の受容を視座にした『今昔竹取』の位置など」を中心に論じられているが、本稿では、それとはまた別の観点として、特に、教科書中の他の教材（学習材）の学習とどのように関連づけることが可能であるか[3]、という点を意識しつつ、『竹取物語』と『今昔竹取』との比較学習の意義や可能性について考察していきたい。

二　「物語」と「説話」

前節で挙げた当該教科書『高等学校　古典B　古文編』（古B322）によれば、学習者は『竹取物語』について、

伝奇物語。作者は未詳。伝承された説話をもとにして、十世紀中ごろまでに成立。現存する最古の物語である。竹取の翁の紹介とかぐや姫の出生、五人の貴公子の求婚、帝の求婚、かぐや姫の昇天、という内容が、素朴で簡潔な文体で語られている。

という理解をすることになる。一方、先に引用した文章にみられたように、『今昔竹取』については、「『竹取物語』とほぼ同じ内容を、短く簡潔に伝える説話である。」と説明されることとなる。注目したいのは、「物語」と「説話」という言葉の使い分けがなされていることである。課題文中に明示されているわけではないが、『竹取物語』と『今昔竹取』の読み比べは、両者の違いをおさえるということだけにとどまらず、「物語」と「説話」とでは何が違うのか、という問題について考えることにも繋がっていくものであろう。勿論、それは『竹取物語』と『今昔竹取』との比較のみをもって結論を出せる問題ではないだろうが、そこでたてられた仮説は、以後、「物語」や「説話（集）」として分類されている他の作品を学習する（あるいは、以前に学習した「物語」や「説話」を振り返る）際にも、一つのものさしとなりうるのではないだろうか。学習の体系化に資するものとして、その意義は小さくないように思われるのである。

では、『竹取物語』と『今昔竹取』の比較から、「物語」と「説話」の違いとして、どのような仮説をたてられるだろうか。当該教科書でも説明されていたように、『今昔竹取』では、「帝に求婚されたかぐや姫は、「自分は鬼でも神でもないけれど、空から人が

迎えに来る。」と答えて、ほどなく昇天してしまう。翁夫婦と別れを惜しむ場面は描かれていない」。

《今昔①》

天皇ノ宣ク、「汝、然レバ何者ゾ。鬼カ神カ」ト。女ノ云ク、「己レ鬼ニモ非ズ、神ニモ非ズ。但シ己ヲバ只今空ヨリ人来テ可迎キ也。天皇速ニ返ラセ給ヒネ」ト。天皇此レヲ聞給テ、「此ハ何ニ云フ事ニカ有ラム。只今空ヨリ人来テ可迎キニ非ズ。此レハ只我ガ云フ事ヲ辞ビムトテ云ナメリ」ト思給ケル程ニ、暫許有テ、空ヨリ多ノ人来テ輿ヲ持来テ、此ノ女ヲ乗セテ空ニ昇ニケリ。其迎ニ来レル人ノ姿、此ノ世ノ人ニ不似ザリケリ。（五七四～五）③

一方、『竹取物語』では、例えば次のように、「翁夫婦と別れを惜しむ」様子が具体的に描かれている。

【竹取①】

たけとり心惑ひて泣き伏せる所に寄りて、かぐや姫いふ、「ここにも、心にもあらでかくまかるに、のぼらむをだに見送りたまへ」といへども、（翁）「なにしに、悲しきに、見送りたてまつらむ。我をいかにせよとて、捨ててはのぼりたまふぞ。具して率ておはせね」と、泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。（かぐや姫）「文を書き置きてまからむ。恋しからむをりをり、取りいでて見たまへ」とて、うち泣きて書く言葉は、……（七三）⑤

当該教科書で「課題」として設定されている、「かぐや姫が昇天した後の帝の行動にはどのような違いがあるか」という点についても確認しておこう。

《今昔②》

其ノ時ニ天皇、「実ニ此ノ女ハ只人ニハ無キ者ゾ有ケレ」ト思シテ、宮ニ返リ給ニケリ。其ノ後ハ天皇、彼ノ女ヲ見給ケルニ、実ニ世ニ不似ズ形チ有様微妙カリケレバ、常ニ思シ出テ破無ク思シケレドモ、更ニ甲斐無クテ止ニケリ。（五七五）

【竹取②】

中将、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫をえ戦ひとどめずなりぬること、こまごまと奏す。薬の壺に御文そへて参らす。ひろげて御覧じて、いとあはれがらせたまひて、物もきこしめさず。御遊びなどもなかりけり。大臣、上達部を召して、「いづれの山か天に近き」と問はせたまふに、ある人奏す、「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近くはべる」と奏す。これを聞かせたまひて、

あふこともなみだにうかぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむ

かの奉る不死の薬壺に文具して御使に賜はす。勅使には、つきのいはがさといふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂に持てつくべきよし仰せたまふ。峰にてすべきやう教へさせたまふ。御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。

（七六～七）

これらについて、当該教科書の指導書[6]では、

『今昔』では、かぐや姫は帝の目の前であっけなく昇天し、帝の悲しみの描写も「わりなくおぼしけれども、さらにかひなくてやみにけり。」と簡潔であるが、『竹取物語』では帝自身は昇天の場に居合わせず、かぐや姫が不死の薬の壺に手紙を添えて帝に献上したとあって、このエピソードを受けた展開が続く。

かぐや姫の手紙を読んだ帝は、悲しみのあまり食事も喉を通らず、管弦の遊びなどもしない。駿河の国にある山が最も高いことを聞き出し、その山の頂上で薬と手紙を焼くように命じた。多く（富）の士を具して山に登り、「不死の薬」を手紙とともに焼かせたのである。

と述べられており、「筋の展開に重点を置いて短くまとめてしまった感のある『今昔』に対して、物語文学である『竹取物語』の叙述は具体的であわれ深い」とまとめられている。「物語文学である『竹取物語』」云々というところに、「説話」と「物語」の違いに関する示唆を読み取りうるが、さほど具体的な説明がなされているわけではない。

一方、第一学習社のかつての教科書『高等学校 新訂 国語一 古典編』（国I528）[7]には、「説話・物語」という単元において、『今昔竹取』と『竹取物語』（かぐや姫が自らの素性などを翁に告白する場面）とがあわせて採録されていたが、その指導書[8]（以下、旧指導書）では、「『今昔物語集』の竹取説話では、かぐや姫の素性および昇天の運命についての告白は、帝を相手にごく簡略に語られ、たちまちのうちに空から迎えの使者が来て、姫はあっという間に昇天してしまう。実にあっけない。筋の展開に重点を置いて短くまとめてしまった感のある『今昔物語集』に対して、物語文学である『竹取物語』の叙述は全く性格が違う」と、現行の指導書と同様の説明をしつつも、その「叙述」の「性格」の「違い」について、より具体的に解説されている。例えば、「かぐや姫の素性および昇天の運命についての告白」について、『竹取物語』では、

【竹取③】

かぐや姫、泣く泣くいふ、「さきざきも申さむと思ひしかども、かならず心惑はしたまはむものぞと思ひて、今まで過ごしはべりつるなり。さのみやはとて、うちいではべりぬるぞ。おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。それをなむ、昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまうで

来たりける。今は、帰るべきになりにければ、この月の十五日に、かの元の国より、迎へに人々まうで来むず。さらずまかりぬべければ、思し嘆かむが悲しきことを、この春より、思ひ嘆きはべるなり」といひて、いみじく泣くを、…（中略）…かぐや姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。かた時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かくこの国にはあまたの年を経ぬるになむありける。かの国の父母のこともおぼえず。ここには、かく久しく遊びきこえて、慣らひたてまつれり。いみじからむ心地もせず。悲しくのみある。されど、おのが心ならずまかりなむとする」といひて、もろともにいみじう泣く。

（六五～六）

と、具体的に語られているが、これについて旧指導書では、

かぐや姫の告白は翁に向かってなされるのだが、それも簡単になされたわけではない。この年の春のはじめごろからもの思いにふけるようになった姫は、まもなくやってくる昇天の日を前にして、いつかはうちあけなくてはならない自分の宿命の告白を一日のばしにのばしてきたのである。翁たちを悲しませたくないからである。…（中略）…この場面は、主にかぐや姫と翁との対話からなっているが、もっぱら姫が主役となって自分の心情を語り続けていることに注意しなければならない。それまでは、姫と翁との会話場面で饒舌なのはたいてい翁で、かぐや姫は必要最小限のことしか言わず、やや存在感が薄いようにさえ見えた。ところがここでのかぐや姫はまことに饒舌である。ここまで姫を饒舌にしたのは、ひとえに翁たちに対する愛情ゆえである。愛が深ければ深いだけ、別れの悲しみも大きいのである。

と述べられ、また、『今昔竹取』についての解説（「主題」の項）で、「『竹取物語』との共通説話でありながら、『竹取』に見られる人間の愛情、運命の悲しみという文学主題は、この説話からは十分に読み取れない」とも説明されている。旧指導書は、『竹取物語』について、「筋の展開」だけでは伝えきれない「人間の愛情、運命の悲しみ」を語る、「物語文学」として捉えているのである。それは、例えば、「物語の表現は、人間を描き、場面を構成し、情念を描き、場面を展開させていく」[8]といった「物語」理解とも通ずるものであろう。

ただ、「物語」に対するそのような理解については首肯されるものの、「筋の展開に重点を置いて短くまとめてしまった感のある『今昔物語集』」といった評が妥当であるかについては疑問も残る。旧指導書では、『今昔竹取』についての先の解説部分（「主題」の項）において、

次の『竹取』との差をきわだたせるために、この『今昔』の話では奇異（怪異とまではいかないが）譚と、それに対する

編者、語り手、読者の抱く興味ということを中心にしておくほうがよい。教科書では省略したが、本説話の末尾には、「惣て心得ぬ事なりとなむ、世の人思ひける。此かる希有の事なれば、此く語り伝へたるとや。」とあって、『今昔』の編者は、この話を世に「希有」な話という点に注目して採録している。

と述べられているが、むしろ、この点を「物語」と「説話」の違いを考える手がかりとしておさえるべきなのではないだろうか。『今昔竹取』については、「奇異」で「希有」な出来事への興味が強く、そのような出来事の「奇異」さ、「希有」さを語ることに眼目があると考えられる。それゆえに「筋の展開に重点を置いて短くまとめて」いるのであり、それを「短くまとめてしまった」と評するのは適切ではないだろう。一方、『竹取物語』については、「奇異」で「希有」な出来事を通して、「人間の愛情、運命の悲しみ」などを語ることに眼目がある。それゆえ、かぐや姫や翁、帝の嘆きがより具体的に描写されているのであろう[10]。

そのように、『竹取物語』と『今昔竹取』の比較を通して、出来事を語る「説話」と、出来事を通して「人間の愛情、運命の悲しみ」などを描写する「物語」といった仮説をたてることにより、「説話」や「物語」として分類される文学作品を学ぶ際のものさしを得られるものと思われる。実際、

説話とは、人々の間に伝承された不思議な話（物語）で、神話・伝説・民話（昔話）の総称であり、それを個性的な文学性によって統一し、文章化したものが説話文学である。従って、説話文学は、叙事的・伝奇的・教訓的・寓話的な特徴を有するが、それらを支えている論理は、民衆的な生活と娯楽であるといえよう。

説話文学は、物語文学が虚構性・描写性を中心としているのに対して、事実性・事件性を眼目としており、物語文学や小説の素材や題材として用いられることが多い。たとえば、竹取説話を物語化したのが『竹取物語』であり、『今昔物語集』の説話を素材として小説化したのが芥川龍之介の一連の歴史小説である。[11]

といった説明がなされることもあり、ここでも触れられているように、それは、「古典」にとどまらず、「現代文」の教材（学習材）などについて考える際の手がかりにもなりうるものとして、有用なのではないだろうか。

勿論、「実はこの「説話」ということばは、明治以降の国文学研究の中で採用された学術用語（ターム）であって、歴史的に使われ続けてきたものではな」く、『日本霊異記』の「景戒も、誰とも知れぬ『今昔物語集』の作者も、自らの作品を「説話集」だと思って書いていたわけではない」ともいわれるように[12]、教科書などにみられる「説話」や「物語」といった分類は便宜的なものに過ぎないという側面もある。だが、それは、「説話（集）」とされながら『今

昔物語集』と呼ばれていることに違和感を覚える学習者が出てくる可能性も考えれば、むしろ、ここであわせておさえておくべき問題であるように思われる。ちなみに、植田恭代氏は、『源氏物語』「若紫」における『伊勢物語』引用を例にとり、「あらかじめ文学史の知識を得ていれば、個別の作品は理解しやすくなる。しばしば図式的な枠組みさえ用いて、ジャンルごとにまとめるのは、わかりやすさを増すための一方法である」、「一方で、作品の側からそれを逆照射してみることも、また重要である。文学史が歴然としてあるわけではない」、「「史」というのは後世からなされたひとつの整理にすぎず、その根ざすところは、さまざまな個別の作品に他ならない」という見解を示されている[13]。首肯すべきものであろう。「説話」や「物語」といった「ジャンル」についておさえつつ、一方でそれを相対化していくことが、古典文学やその文学史の学習には必要なのではないだろうか[14]。

三　「物語」の増補成長の可能性

前節においては、冒頭で挙げた当該教科書『高等学校　古典B　古文編』（古B322）に述べられていることのうち、『今昔竹取』にかぐや姫が「翁夫婦と別れを惜しむ場面は描かれていない」という点や、『今昔竹取』と『竹取物語』とで「かぐや姫が昇天した後の帝の行動にはどのような違いがあるか」という点について主に考え、そこから他の「説話」や「物語」の学習における一つのものさしを得られるであろうことを述べた。そこでは、当該教科書でもう一点の「課題」として設定されている、「『今昔物語集』と『竹取物語』では、かぐや姫が結婚の条件として貴公子たちに出した難題の数と内容が、どのように異なっているか」という問題についてはひとまず措く形となったが、この問題を考えることによっても、教科書中の他の教材（学習材）と関連づける学習が可能になるのではないかと思われる。

『竹取物語』と『今昔竹取』、それぞれにおける難題提示の場面を確認しておこう。

【竹取④】

かぐや姫、石作の皇子には、「仏の御石の鉢といふ物あり。それを取りて賜へ」といふ。くらもちの皇子には、「東の海に蓬莱といふ山あるなり。それに、銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ」といふ。いま一人には、「唐土にある火鼠の皮衣を賜へ」。大伴の大納言には、「龍の頸に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ」。石上の中納言には、「燕の持たる子安の貝取りて賜へ」といふ。　（二四）

《今昔③》

……女、初ニハ、「空ニ鳴ル雷ヲ捕ヘテ将来レ。其ノ時ニ会ハム」ト云ケリ。次ニハ、「優曇花ト云フ花有ケリ。其レヲ取テ持来

レ。然ラム時ニ会ハム」ト云ケリ。後ニハ、「不打ヌニ鳴ル鼓ト云フ物有リ。其レヲ取テ得セタラム折ニ自ラ聞エム」ナド云テ、不会ザリケレバ、……　（五七三）

当該教科書の指導書では、難題それぞれについて、他の作品や文献にみえる記述などを紹介しながら、一つずつ丁寧に説明をしているものの、『竹取物語』と『今昔竹取』とで難題の数が異なることについては特に解説をしていない。『竹取物語』について、「五人の貴公子一人一人にかぐや姫から直接難題が示されることになる」といったことや、『今昔竹取』について、「思いをよせる上達部や殿上人たちに出した三つの難題であるが、これらはどのように発せられたのか、三つをすべて持って来るように全員に命じたのか、一つの難題を出し、無理と知って二つ目になったのか、読み取れない」といったことを、それぞれの「出題状況」として確認するにとどまっているのである。

しかし、難題の数を問題にするのであれば、【竹取④】の場面で三人目の求婚者が「いま一人には」とされている点に関して、「まだ三人残っているのに、「いま一人」はおかしい。求婚者が三人であった古い形の物語をとどめている」[15]というように、「現『竹取物語』が『今昔竹取』のように求婚者三名の形のものから改作せられた」[16]ものである可能性が指摘されていることをも紹介すべきなのではないだろうか。そのような可能性に学習者もまた自ら近づきうることを、森氏は次のように示唆されている。

『今昔竹取』の『竹取』からの抄出説も研究史もひとまず措き、この課題として発問すると、定まった物語の五つの題を三つに減じたとしてもどうしても五つの影響から逃れられない三課題を作ってしまうのでは、という回答が多い。学習者にとって『竹取』を先に受容していることもあり、その五つと共通するものを置くほうが安定度が高く感じるためである。しかし、一つとして共通項がない以上、五から三への抄出の可能性は低いのではないか、という方向になる――こうしたテクストの比較による読みを試みることができるのも、この課題の利点である。[17]

難題の数について、相違の確認のみで終わるのではなく、その相違の原因をも、明らかにはしえないまでも考えてみる、ということを、ここでの学習に盛り込むべきではないだろうか。

もし、これ以前に「国語総合」の教科書などにおいて次の『竹取物語』冒頭部を学習し、「この物語の数字は「三」が基本」[18]、「「三」は神聖数だといわれ、この物語にも「三月」「三日」など、しばしば使われる」[19]といったことを学習者が既におさえていたとすれば、そのことと関連づけることも可能になるだろう。

【竹取⑤】

いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にま

じりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。…（中略）…この児、やしなふほどに、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪あげなどとかくして髪あげさせ、裳着す。…（中略）…この子、いと大きになりぬれば、名を、御室戸斎部の秋田をよびて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫と、つけつ。このほど、三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきらはず招び集へて、いとかしこく遊ぶ。

（一七～九）

「三」という数字は、次の通り、『今昔竹取』の冒頭部にも同様にみられるものである。

《今昔④》

今昔□天皇ノ御代ニ一人ノ翁有ケリ。竹ヲ取テ籠ヲ造テ、要スル人ニ与ヘテ其ノ功ヲ取テ世ヲ渡リケルニ、翁籠ヲ造ラムガ為ニ篁ニ行キ竹ヲ切ケルニ、篁ノ中ニ一ノ光リ、其ノ竹ノ節ノ中ニ三寸許ナル人有。翁此レヲ見テ思ハク、「我レ年来竹取ツルニ、今此ル物ヲ見付タル事」ヲ喜テ、片手ニハ其ノ小人ヲ取リ、今片ニ竹ヲ荷テ家ニ返テ、妻ノ嫗ニ、「篁ノ中ニシテ、此ル女児ヲコソ見付タレ」ト云ケレバ、嫗モ喜テ、初ハ籠ニ入レテ養ケルニ、三月許養ル、例ノ人ニ成ヌ。其ノ児漸ク長大スルマヽニ、世ニ並無ク端正ニシテ、此ノ世ノ人トモ不思エザリケレバ、翁嫗弥ヨ此レヲ悲ビ愛シテ傳ケル間ニ、此ノ事世ニ聞エ高ク成テケリ。

（五七二）

そのようなことをおさえつつ、さらに、「現『竹取物語』」を「求婚者三名の形のものから改作せられた」ものとみる立場からの指摘として、次のように、「前の三人」と「後の二人」との違いなどについての説明もなされている、と紹介すること（あるいは、実際に学習者にそのような比較を促すこと）もありえよう。

……現『竹取物語』の五人の求婚者のうち、はじめの三人は、「石作の皇子は、心のしたくある人にて」（二五ページ）、「くらもちの皇子は、心たばかりある人にて」（二七ページ）、「右大臣阿倍御主人は、財豊かに家広き人にておはしけり」（三七ページ）というように、それぞれの冒頭に、その人物の性格的特徴がしるされているのに対して、第四・第五の大伴の大納言と石上の中納言にはこのような紹介がなく、その人物の行動がただちに描かれている。…（中略）…前の三人は贋物であっても、とにかく形を整えて宝物を持参したのに対し、後の二人は宝物を手にすることができなかったばかりか、…（中略）…天下の人のあこがれの的であるかぐや姫の婿がねにはふさわし

くない形でその失敗が描かれているのである。[20]

ちなみに、旧指導書[21]は、今川範政の『源氏物語提要』について触れ、その「絵合巻の注に、『竹取』の梗概が記してあって、かぐや姫の名は、現行の「なよ竹のかぐや姫」ではなく、「さき竹のかぐや姫」と紹介され、この女性に「心を尽くしし人、四人あり」と書いて」あることなどから、「現存『竹取』の五人の求婚者たちが出揃う前に、求婚者四人の『竹取』があったのかもしれない」ことを述べ[22]、「『今昔』の竹取説話では、貴公子の名は明示しない三課題だった。これが課題内容の改変に伴って、課題数も増加し、五人、五課題に定着する前、四人、四課題という段階があったかもしれない」としている。『源氏物語提要』という別の文献の紹介が必要になる分、難易度も高くなるため、ここまで踏み込むべきであるとは思われないが、現行の『竹取物語』が増補成長という過程を経て成立したという可能性については、難題の数を問題にする場合には、やはり言及すべきことなのではないだろうか。

そして、そのように、物語の成立過程として増補成長があった可能性に言及するのであれば、『伊勢物語』においても同様の可能性が想定されていることをあわせて確認すべきであろう。実際、当該教科書『高等学校 古典B 古文編』（古B322）でも、『伊勢物語』については次のように説明されている。

歌物語。作者は未詳。十世紀中ごろまでに段階的に増補されて成立。約百二十五段から成る。六歌仙の一人、在原業平（八二五―八八〇）を思わせる男を主人公とし、その一代記ふうの体裁をとっている。

複数の短い話が集まって成り立っている『伊勢物語』を、ひとつづきの話である『竹取物語』と同様に捉えることはできないという見方もあるかもしれない。だが、先に触れた「三」という数字の問題と関わる指摘として、『竹取物語』における「求婚譚は、すべて「三年」という一つの枠の中に入ってしまう」ものであり、

……たとえば求婚譚が三年という枠からはみ出さないかぎり、求婚者が三人であろうと五人であろうと（「三」という単位を基盤としているので、求婚者三人という形が本来のものであろうが）、物語の構成にはなんら変りがないということなのである。加えて言えば、求婚者相互の交渉がまったくない、常識的に言えば自分が難題を成就するか否かということと同時に、他の四人がどうしているかということがなによりも彼らの関心事であるはずであるが、この物語はその点をまったくしるさない。五人の求婚者は三年の枠の中でそれぞれかってに行動しており、それが三人であろうと五人であろうと関係がない、また難題を変えても、求婚者の名前を変えても、物語全体にはなんのかかわりもないというところにこの物語の構成の特色があるというわけである。

といった見方もなされている[23]。これに従うならば、『竹取物語』の求婚譚部分もまた、複数の話が集まって成り立っているといった見方が可能であり、『伊勢物語』の構成に通ずるものを見出しうるのではないだろうか。

ちなみに、『源氏物語』や『うつほ物語』についても[24]、「それぞれ、一物語としての独立性を有する」「各巻」が、「主人公を共通要素に持つことで」「繋がりを持つ」といった見方がある[25]。『伊勢物語』における「在原業平を思わせる男」、『竹取物語』における「かぐや姫」や「翁」なども、「独立性を有する」各物語に「繋がり」を持たせる「共通要素」と考えられよう[26]。

『竹取物語』や『伊勢物語』の増補成長の可能性をおさえることは、「物語」全般（ひいては他ジャンルの文学作品それぞれ）がどのような成立過程を経ているか、そして、それゆえにどのような性格を持っているか、という問題などをも意識することに繋がっていきうるものだろう。学習者はここでも一つのものさしを手にしうるのである。

四　おわりに

『竹取物語』と『今昔竹取』との比較学習は、「物語」と「説話」の違い、「物語」の成立過程の一可能性などについて考える契機となるものであり、教科書中の他の「物語」や「説話」を学習する際のものさしを得ることにも繋がるものと考えられる。「さまざまな古典文学作品をそれぞれ部分的に読んだ、というだけで古典学習を終わらせないためにも、教材同士を関連づけ、繋ぐことによって、ある程度でも学習内容を体系化し、「古典世界」の広がりや繋がりを学習者に意識させていくべき」[27]旨を以前にも論じたことがあるが、本稿も、『今昔竹取』を『竹取物語』の比較対象として取り上げることにより、『伊勢物語』等、教科書中の他の教材（学習材）と関連づけ、学習内容を体系化していきうることを示そうとしたものである。

『竹取物語』は、中学校教科書においても定番教材（学習材）の一つとなっている。全ての中学一年生用教科書に採録され、いずれの教科書もあらすじや解説等をまじえて、物語の全体像をつかめるような作りになっているため、高等学校で『竹取物語』を学習する場合、学習者にとっては、すでに大方の内容を把握している作品の再度の扱いになることが多いと考えられる。すなわち高等学校ではより発展的な学習が可能になるものといえ、その選択肢の一つとして、『今昔竹取』との比較ということがありうるように思われるのである。かつて『高等学校 新訂 国語一 古典編』（国Ⅰ528）で試みられていたように、教科書に『竹取物語』と並べる形で『今昔竹取』の本文を載せることなどもあってよいのではないだろうか。

なお、本稿では、ひとまず教科書中の他の教材（学習材）との関連づけに焦点を絞ったが、例えば、旧指導書にも、前節でみた

増補成長の可能性との関連で、

民間で語り伝えられる伝承は流動性に富む。伝承・説話を筆録する『今昔』の竹取説話も、流動する一局面を伝えた。伝承・説話を文章化し物語化するときには、『今昔』の流れとはまた別な流れの話をベースにしたかもしれない。『今昔』と『竹取』の関係は、いろいろな空想を楽しませてくれる。[28]

と述べられているように、「伝承・説話」の「流動性」といったことについても言及することがあるならば、更に、他の竹取説話の紹介、「伝承・説話」のヴァリアントに関する説明などがあってもよいのかもしれない。例えば『海道記』中の竹取説話などにみられるような、かぐや姫が鶯の卵から生まれる点などは、学習者の興味をひきうるものだろう。『竹取物語』と『今昔竹取』の比較学習は、さらなる発展性を秘めているものと思われる。

注

(1) 紙幅等の都合上、各教科書における『竹取物語』本文引用範囲の詳細については省略するが、『高等学校 古典B 古文編』(古B322)では「帝の求婚」・「かぐや姫の昇天」、『高等学校 古典B』(古B328)では「帝の求婚」・「かぐや姫の昇天」、『高等学校 標準古典B』(古B324)では「火鼠の皮衣」・「かぐや姫の昇天」、『高等学校 標準古典A 物語選』(古A305)では、「火鼠の皮衣」・「帝の求婚」・「かぐや姫の昇天」(鉤括弧内は各教科書における見出し)が採録されている。

(2) 森晴彦氏「『今昔竹取』と『竹取物語』生成過程の背景――『古典B』比較学習の設問採択に際しての覚書――」(『国文学踏査』第二十七号、二〇一五年三月)。

(3) 拙稿「定番教材(学習材)を繋ぐ古典教育(学習)――平安時代の文学作品を例として――」(『日本文学』第六四巻第一号、二〇一五年一月)においても、いくつかの定番教材(学習材)を関連づけて学習することの意義について論じた。また、例えば、第一学習社の平成二十八年(二〇一五年)度用のパンフレット「教科書のご案内」には、「教材どうしに有機的な関連をもたせるなど、生徒さんが古文に関心を深められるような編集上の工夫を凝らしています」(二八頁)とあり、当該教科書でもそのようなことが意図されているようである。本稿では、そのような「編集上の工夫」に賛意を表しつつ、教科書や指導書で示されていることにとどまらない、『竹取物語』と『今昔竹取』との比較学習の意義や可能性について、さらに掘り下げていきたい。

(4) 以下、『今昔物語集』の引用本文は全て、馬淵和夫氏・国東文麿氏・稲垣泰一氏(校注・訳)『今昔物語集④ 新編日本古典文学全集38』(小学館、二〇〇二年)に拠り、末尾に頁数を示す。

(5) 以下、『竹取物語』の引用本文は全て、片桐洋一氏・高橋正治氏・福井貞助氏・清水好子氏(校注・訳)『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語 新編日本古典文学全集12』(小学館、一九九四年。『竹

取物語』は片桐氏）に拠り、末尾に頁数を示す。

(6)『高等学校 古典B 古文編 指導と研究〈全6分冊〉』（第一学習社）。

(7) 平成五（一九九三）年二月二十八日文部省検定済、平成八（一九九七）年二月十日発行。

(8)『高等学校 新訂 国語一 古典編 指導と研究〈全3分冊〉』（第一学習社）。

(9) 関根賢司氏「かぐや姫 神話・昔話・物語」（『竹取物語論 神話／系譜学』おうふう、二〇〇五年。初出は、『國文學 解釈と教材の研究』第四十二巻第二号、一九九七年二月）。

(10) 森田恒有氏「『竹取物語』と『今昔物語集』の比較による読解の授業」（『横浜国大国語教育研究』第十七号、二〇〇二年一〇月）では、「私立の男子校」の中学三年生（但し、「進学校のため、カリキュラムはすでに高校一年の段階に達している」とされている）の授業における、『竹取物語』と『今昔竹取』との比較学習（それぞれの冒頭部が中心）の成果の報告がなされており、ここでおさえた点と通ずるものが、実際に学習者たちが読み取ったこととして挙げられている。例えば、「『竹取』は翁の心情がよく表されているが、行動は細かく書いていない。物語的である。」、「『今昔』は様子や行動を詳しく書いているが、登場人物の心情は詳しく書いていない。記録的である。」、「『竹取』ではかぐや姫に対する愛情が具体的に描かれている。」、「『今昔』でもかぐや姫への翁の愛情は書かれているが、表現が同じで、しかも具体的ではない。」等々である。

(11) 西沢正史氏編『古典文学を読むための用語辞典』（東京堂出版、二〇〇二年）の「説話文学」の項（執筆者は西沢氏）。

(12) 小峯和明氏編『日本文学史 古代・中世編』（ミネルヴァ書房、二〇一三年）の第七章「日本霊異記から今昔物語集へ」（執筆者は千本英史氏）。

(13) 植田恭代氏「北山での垣間見」（前田雅之氏・小嶋菜温子氏・田中実氏・須貝千里氏編『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ［古典編］―文学研究と国語教育研究の交差』右文書院、二〇〇三年）。

(14) 文学史学習のありかたについては、注(3)拙稿及び「文学史教材（学習材）としての『源氏物語』「絵合」巻――作品に内在する文学史――」（『源氏物語続編の人間関係 付 物語文学教材試論』新典社、二〇一四年。初出は、『早稲田大学国語教育研究』第二九集、二〇〇九年三月）でも論じたことがある。

(15) 注(5)前掲書、二四頁の頭注九。

(16) 注(5)前掲書、「解説」八三～四頁。

(17) 注(2)森氏前掲論文。ここで森氏が「『今昔竹取』の『竹取』からの抄出説」として挙げられているのは奥津春雄氏「今昔物語集の竹取説話」（『竹取物語の研究――達成と変容――』翰林書房、二〇〇〇年。初出は、『平安朝文学研究』三巻二号、一九七一年一二月）の説で、それは「「今昔竹取」は民間伝承の採録ではなく、『竹取物語』、または『竹取物語』の再話資料を、『今昔物語集』の設定した主題に基づいて、翻訳あるいは再話したもの」であるといったものであるが、「『今昔竹取』が梗概化のために用いた『竹取

物語』は現存のそれではなく、現存本に先行する古『竹取物語』であったか」（注(5)前掲書、「解説」八三頁）との見方もあり、詳細は措くが、『竹取物語』と『今昔竹取』の関係については、さまざまな可能性が考えられる。その点は学習者にも意識させておく必要があろう。

(18) 注(5)前掲書、一七頁の頭注六。

(19) 堀内秀晃氏・秋山虔氏校注『竹取物語 伊勢物語 新日本古典文学大系17』（岩波書店、一九九七年。『竹取物語』は堀内氏）、三頁の脚注七。

(20) 注(5)前掲書、「解説」八四～五頁。引用部にみえる頁数も同書のもの。「後の二人の物語は、話をおもしろおかしくするために、本来、求婚者になりえない烏滸者をあえて登場させた烏滸物語になっているのである。想像にすぎるかもしれないが、物語の骨格がおおむねできあがって、語り手（作者）に余裕ができた後に、話をおもしろおかしくするために付加された部分であると考える可能性が十分にあると思う」と続けられている。

(21) 注(8)前掲書。

(22) この問題については、稲賀敬二氏「求婚者四人の「竹取物語」――傍流伝本の復権――」（王朝物語研究会編『研究講座 竹取物語の視界』新典社、一九九八年。初出は安田女子大学『国語国文論集』一九九五年一月）で詳しく論じられている。

(23) 注(5)前掲書、「解説」九一頁。

(24) なお、『竹取物語』や『伊勢物語』、『源氏物語』については、注(3)拙稿において、話型や作者といった視点からも、関連づけ繋ぐ学習が可能である旨の提案をした。

(25) 加藤昌嘉氏・中川照将氏編『テーマで読む源氏物語論 第4巻 紫の上系と玉鬘系――成立論のゆくえ』（勉誠出版、二〇一〇年）の「総説：〝『源氏物語』はどのように出来たのか？〟を考えるために」（執筆者は加藤氏・中川氏）。

(26) 同一視すべきものではないかもしれないが、学習者にとって理解しやすくなるように、ほぼ一話完結型でありながら、「主人公」などの登場人物を「共通要素」として持ち、各話がゆるやかに繋がっているような現代の連続テレビドラマやアニメ、漫画などを引き合いに出すこともありえよう。ちなみに、注(25)前掲論文中でも、物語の成立に関わる問題について、『スター・ウォーズ』や『仮面ライダー××』といったものなどを引き合いに出した解説がなされていて、わかりやすい。

(27) 注(3)拙稿。

(28) 注(8)前掲書。

（本学准教授）